



CONTENTS

「米国はHIVに対する差別や偏見と闘うための対策を続ける」.....	01
ネスト・プログラム ～新プログラム始まる～.....	02
第26回日本エイズ学会学術集会・総会.....	
HIV陽性者参加支援スカラシップ報告会.....	07
QOGL vol.2～性感染症編～「もしかして、STD?」.....	08
部門研修レポート.....	09
Peer Empowerment Program ～オトナの女的活動のあらたな動き～.....	11
部門報告 (2013年1～3月).....	12
特定非営利活動法人ぶれいす東京 2012年度 活動報告会のご案内.....	16

「米国はHIVに対する差別や偏見と闘うための対策を続ける」

ジョシュア・ジョンソン (米国大使館 政治部 二等書記官)

30年以上前に米国で HIV の感染が広がり始めた時には、HIV がどのように広がったのか、どれくらいの感染力があるのかなどを知る者はいなかった。恐怖や無関心が偏見や差別に大きく拍車をかけた。HIV/エイズとともに生きる人たちは、仕事、家、友人や家族までを失った。HIV の理解や治療に対する前向きな理解が進む中でも、偏見や差別は、HIV/エイズとともに生きる人たちにとって、米国だけでなく世界中で深刻な課題であり続けている。

2010年7月に、オバマ大統領は初の公式な国家HIV/エイズ戦略を明らかにした。この戦略は、年間の新規感染者数を25%減少させ、2015年までに HIV感染率を30%低減させることを目指している。新規HIV感染に関し、この大統領の戦略計画は、毎年米国でおよそ5万人の新規感染が報告されており、その多くが男性同性愛者および有色人種のコミュニティに集中している事実を明確に認識したものである。

しかし、予防だけがオバマ大統領の戦略の特筆すべき特徴ではない。ホワイトハウスはまた、この戦略計画においては市民権法の施行の強化が求められることを強調している。司法省は、バリアフリーの医療政策構想の一環として、HIV/エイズとともに生きる人たちに対する差別と闘う努力をしている。司法省は、米国障害者法を根拠として、HIV/エイズとともに生きる人たちを差別する個人や法人に対して和解締結をすることが可能である。今年2月時点で差別に関する複数の和解締結例があったことが発表された。

その一例だが、2月12日、バージニア州のある歯科医院が、男性HIV陽性者に対して、その後の彼のすべての予約を各診療日の最後の時間枠にすることを求めていることが分かった。司法省は、この歯科医院が、患者が HIV陽性者であることを理由にほかの患者と同様の選択肢や可能性を提供することを怠ったと判断した。司法省はまた、この歯科医院が通常の診療時間内のすべての時間枠で

その患者を診察することができないという法的根拠はなかったとした。この和解協議により、歯科医院側は7,000ドルをその患者に支払い、民事制裁金として3,000ドルを支払う義務を負った。加えて、この歯科医院は米国障害者法に関する研修を従業員に対して行い、差別予防対策を策定し実施することを義務付けられた。

また、2月6日、米国司法省は、摂食障害等の疾患の治療を行うミズーリ州の治療センターと和解に至ったことを発表した。司法省は、この治療センターが米国障害者法に違反し、摂食障害の治療を拒否したと主張した。その女性患者がカウンセリングを受ける要件を満たしていると同センター自ら判断をし、治療スタッフからは HIV陽性者の治療が可能であるというアドバイスを受けていたにもかかわらず、その女性が HIV陽性であることを理由に治療を拒否したことが明らかとなった。また同省は、センター側がその女性を治療する意思がないにもかかわらず、何か月にもわたって、その女性に治療プログラムの待機リストに名前を載せてあると伝えていたとした。順番を待つ間に、女性は体調を崩し、健康状態は悪化した。このセンターの行動は、彼女が適切な治療を受けるのを7か月も遅らせてしまう結果となった。

「HIV陽性であるというだけで必要な治療を受けさせないという事実は受け入れがたい。司法省公民権局は、HIVに対する差別を、それがいかなる類のものであれ、深刻に受け止めており、HIVとともに生きる人たちの周縁化を許すことはできない」とトーマス・E・ペレス公民権局司法次官補は述べている。この和解協議では、センター側は、11万5,000ドルを和解金として女性に支払い、民事制裁金として2万5,000ドルを支払うことになる。それに加えて、障害者法の研修を従業員に対して行い、差別予防対策を策定し実施することが義務付けられ、さらに司法省による4年間の観察の対象となる。

司法省は医療以外の分野にも力を尽くし、2012年9月

12日、ペンシルバニア州の私立学校が13歳のHIV陽性の男子生徒の入学を拒否した事例において和解に至った。同校は、HIV陽性であることを理由に男子生徒の入学願書受理の手続きを中止したことを認めたが、他の生徒に対する潜在的なリスクを分析したうえでの決定であったと主張した。司法省は、「学校は、HIV陽性者を含む、障害をもつ人たちが“物品およびサービスを完全に享受”することから排除してはならない」とした。学校側は、決定を撤回し、今年2月に男子生徒に入学許可を出した。

オバマ大統領が述べるように、「いかなる人もHIV/エイズにより偏見や差別の対象とならないように意識を高める必要がある。」米国政府は、オバマ大統領のこの構想の実現を確実にすべく前進し続ける。

ジョシュア・ジョンソンは、日本に関する国別人権報告書を作成する政治担当官である。ぶれいす東京は、2012年の報告書のために日本国内のHIVと差別に関する情報提供を行った。在日米国大使館は、6月にルース大使主催で大使公邸にて開催されるLGBTプライド月間のレセプションなどの取り組みを通じて、LGBTコミュニティに関わっている。大使館はまた、LGBT団体に協力し、2013年4～5月に行われる東京レインボーウィークを支援している。

翻訳：ボランティアスタッフ 室峰秀行

ジョンソン氏と初めて会ったのは、今年1月であった。率直で飾らない彼は、アメリカ政府が毎年発表する国別人権報告書を作成するにあたり、「前回、日本ではHIV陽性者への差別がないと書かれていたが本当か？」と訊ねてきた。日本の実情をお話したところ、それを参考に、より現状を反映したものに記述をすぐ修正したという。アメリカ政府は人権外交の一つとしてLGBTへの支援をにかけており、ぶれいす東京からも生島、大槻が意見交換の場に参加させていただいている。(生島／大槻)

ネスト・プログラム ～新プログラム始まる～

就職支援セミナー/アサーティブ・コミュニケーション/トークサロン「看護師として働く陽性者のミーティング」/新陽性者PGM同窓会

就職支援セミナー

2月20日に開催した「HIV陽性者のための第1回就職支援セミナー」には33人の参加者が集まりました。企業側は、IT系企業など2社にご参加いただきました。直前で不参加となる企業がありましたので、また近いうちに改めて機会を設けたいと思います。

2社の参加によるセミナーでしたが、内資系、外資系と対照的な2企業による内容の濃い会となりました。企業担当者には前半ではレクチャーをお願いし、後半では本当に沢山の質疑応答に誠意をもって答えていただきました。

当日アンケート(回答者32人)によると、ネスト・プログラムへの参加が初めてという方が25%で、Webでみた、病院に設置されていた、医療者や友達から勧められたというきっかけでご参加いただきました。就労状況は、就職活動中：20%、転職活動中：33%、検討中：23%、



就労支援セミナーで報告をする生島

失業中だが動いていない：13%でした。セミナーの評価は、「大変よかった／よかった」との回答が合わせて80%を越えていました。また、今後の開催頻度の希望については、年に2回が56%、それ以上という方が31%という回答で、定期開催への期待が高くなりました。自由記述には、「応募してみたい企業がありました。」「企業採用担当者の本音と思われる事が聞けたと思います。」という感想がありました。

後日、企業さんへ直接連絡を取られた方もいるとお聞きしています。皆様の就職活動のお手伝いになっていたら、私たちスタッフとしてもうれしいです。今回参加出来なかった皆様、ぜひ次の開催に注目してください。

(報告：生島／大槻)

参加者より

「未来に希望が持てた日」

カール

2月20日「HIV陽性者のための第1回就職支援セミナー」参加企業の中に某企業がありぜひ話が聞きたくて、参加しました。

セミナーには約40名が参加し、IT関連企業、某企業と順に説明、最後に参加者からの質問、約1時間30分の内容でした。2社は急遽来れませんでした、有名企業ばかりでとても驚きました。

女性担当者からは、プライベートなお話をお聞きし、

その後の話をリラックスして聞く事ができました。2社とも説明内容は、HIV陽性者を雇用する経緯、会社内容の説明、仕事内容、雇用形態、勤務地が主でした。質問タイムでは、必要なスキル、勤務時間、年休、正社員への可能性、障害者の雇用人数、通院などでの休みの取りやすさ、自分の障害内容を会社内の人達に説明する必要があるか？などあり、各質問に対して、明確な回答を聞くことができました。

私は2ヶ月前に告知され、近々障害者申請し投薬が始まる予定です。精神的に落ち着いてますが、また不安に陥ると予想できるので、今回参加した事により、将来を感じられてエネルギーを頂き、前向きに考えられるキッカケになりました。希望の某企業は、私にとって更に身近に感じる事ができ、随時募集なので手帳発行され次第応募すると決めました。4月から法律が変更になり企業の雇用の障害者数の割合が増えます。私達にとっても無理に隠す事なく働ける環境が作られていく事は、今後1人でも多くの人に未来を与えてくれると思っています。

「さらなる『理解』の広がり願って」 Y

参加企業2社の話をお伺いして、HIV陽性者の就労についてとても理解してくださっているという印象を受けました。障がい者をオープンにすることで、通院のための欠勤を不審に思われずに済んだり、投薬や体調管理がやりやすくなったりと、いろいろなメリットがあり、有難いと感じました。

個人的な体験から言うと、障がいを隠して就労していても、通院の際に怪しまれたり、年末調整の際、上司に障がいを申告したことが同僚に感づかれたりと、ばつの悪い思いをしたこともあります。また求職活動中には、面接でHIV陽性の事実を話すと感染経路などしつこく聞かれたり、他の応募者に聞こえる状況で障がいのことを聞かれたりなど、不快な体験もありました。

今回お話くださった2社のような、理解ある企業が今後もっと増えてきてほしいなと思います。通院・投薬やプライバシーなど配慮いただければ一般就労者と同様変わりなく働けるので、余計な疑念を生まない分企業側にもメリットがあると思います。

あと、HIVと共に精神障がいをお持ちの方や、地方で求職するHIV陽性者への理解も、今後もっと進むといいなと思いました。

「背筋を伸ばして」 ひぐらし

会場に入り、受付を済ませて最初に気付いたことは、スーツを着た参加者の少なさである。もちろん、事前のメールにドレスコードの指定はなかった。しかし、仮にも企業の人事担当者が参加しているのだ。「就職支援セミナー」といえど、この会は「企業説明会」の側面も持つはずである。私はまずその服装から、参加者の意識にばらつきがあることを感じた。

はたしてあの日あの会場に、今回の企業との出会いが現実の就職に繋がるかもしれないと本気で思っていた者がどれだけいたろうか。「何かうまい話はないか」と物見遊山のようにやってきた者なら、有名企業の敷居の高さに、ある種の居心地の悪さを感じたかもしれない。ハンディキャップはもちろんある。それも、それぞれに平等

でないハンディキャップがある。だが、それを言い訳にして「誰かがなんとかしてくれる」と救いの手を待ち焦がれているだけでは埒が明かない。弱みも勘定に入れて、そこから自力で踏み出せなければ、今いる地点からの前向きな変化はないのだ。

妙に卑屈になる必要はない。やれることはやろう。何はなくとも、せめて態度と発言で、「私の心は元気で前向きです」と主張しなくては、誰も欲しがってくれない。

参加企業より

「就職支援セミナーに参加して」 (某企業)

この度、障がい者の採用および雇用支援を担当している者として話す際に心掛けたことは、通り一遍の建前論ではなく、当社が免疫機能障がい者を採用する方針を決める際に実際どのように考え、取り組んだことを正直に包み隠さずお伝えすることです。短い時間にもかかわらず参加者からは色々な具体的な質問を頂き、活発な情報交換の場になったと思われます。

障がいへの理解は進んでいると思う反面、残念ながら実際採用に踏み出せないでいる企業もあることも事実です。そして時には厳しい状況に遭遇することがあるかもしれませんが、一人ひとり社会にお役に立てる才能が健常者とかわりなくあるはずで、自信をもって社会参加をしていただきたいと思います。

アサーティブ・コミュニケーション 自己表現のABC 第1期

新プログラム「アサーティブ・コミュニケーション 自己表現のABC」の第1期を1/19と26に開催しました。2回連続参加が条件でしたが、定員の15人に達してしまうほどの反響でした。

講師は沢部ひとみさん。パフスクールで「再出発のための自分史」を主宰したり、NPO法人アサーティブジャパンの認定講師を務めています。以下は、沢部さんからこのプログラムのフライヤーに寄せていただいた文章(抜粋)です。

「あの時ちゃんと断れていたら……思い切って頼めていたら……と後悔することはありませんか？(中略)どうしたら、相手に嫌な思いをさせずに、自分の意思を伝えることができるのでしょうか？(中略)相手も自分も大切にする自己表現＝アサーティブなコミュニケーションを身につけて、より幸せな未来を切りひらきましょう。」

プログラムの1日目は「自分のコミュニケーションの癖をつかみ、アサーティブなコミュニケーションの心構えを学ぶ」。2日目は「アサーティブの心構えにもとづき、自分の意思をどう伝えるのか、伝え方のスキルを学ぶ」。

女性の参加者も多く、最初は緊張していたものの、終始なごやかで、みんなでアサーティブを身につけようという熱気にあふれていた2日間でした。今後の開催を企画していきたいと思います。(生島)

参加感想文

「関係を育んでいくために」 マル(都内在住 男性)

皆さんは「そんなつもりで言ったんじゃないのに」「な

んでわかってくれないんだろう」って経験ありませんか？

プログラムに参加して、自分の話が相手に如何に伝わっていないのか／どのように伝わっていたのかを認識し、そして、きちんと伝えていくためには、どうしていけばいいのかを体感的に学ぶことができました。

アサーティブについて自分なりに解釈すると、「自分の気持ちや考えを一方向的に伝えるだけでなく、相手のことも尊重し、対等・率直に対話を重ねていくことが大事」で、そういうスタンスで向き合っただ対話することが、相互の理解を深め、関係を育んでいくことにつながるのだと思いました。

文字にすると「当たり前」と思ってしまうかもしれませんが、プログラムを通じて、特にロールプレイにより疑似体験することで、きっと掴めることがあると思います。

ともすると個人的な話題にも及んでしまいそうなこともあり、ちゃんと成り立つのかなあと懸念していましたが、自分の問題をなんとかしたいとの意欲を持って参加されている方が多く、フランクに語り合える雰囲気の中で取り組むことができました。

参加者の皆さん、スタッフの方々、ありがとうございました。

「はじめて参加してみて」

M (女性 30代 感染告知年2000年 異性愛者)

私は、今回が初めてのプログラム参加でした。プログラムは座って、先生の講義を聴くのかな？と硬いイメージを思っていたら、まず最初に自己紹介から始まり、参加者の方々と意見の交換やロールプレイをして、皆さんと話す機会がたくさんあったので、初参加で緊張していた私には、とても入りやすいプログラムでした。

プログラムの内容も自分を知ることができ、相手に自分の気持ちを伝える時の大切なポイントを勉強できたので良かったです。実践してみたら相手の反応も普通で、むしろ好意的な感じで受け入れてくれたので、「断りづらい、頼みづらい」雰囲気を自分で作っていたのかなと感じました。

また、プログラムを通して同じ陽性者の方達と話すことができ、勉強になり楽しい時間を過ごすことができました。皆、明るくて、優しく、深みがあり、勇気をいただけました。また、一歩前に進める気がします。

今回のプログラムに参加して、コミュニケーションはスキルだけではなく、「心」も大切だと思いました。これからいろいろな人達と出会い、学び、人間力を高めていけたらいいなと思います。

「アサーティブコミュニケーションのプログラムに参加して」

あき

以前からアサーティブと言う言葉は何度か聞いていて、本など読んだ事はありませんでしたが、実践してみても正直難しいなと感じました。でも本を読んでいるだけではここまで感じる事は出来なかったと思うので、参加してよかったと思っています。自分の感じ方や表現の癖を意識しながらちょっとでも変わっていったら、断然生きていきやすくなると思います。

今まで自己主張ってわがままとか生意気とかマイナスのイメージでしたが、今ではのびのびと生活するには

必要な事だと思えるようになりました。また機会があれば是非参加したいです。

「相手との深い人間関係を築き上げるために」

ノボル (30代)

アサーティブコミュニケーションは正直自分の望むコミュニケーションとは違いました。

自分の気持ちを伝え、もっと楽に生きることを目的にしていたのですが、アサーティブネスの考え方はもっとコミュニケーションの本質から考え直すいい機会になったとおもいます。

自分は無意識に自分の気持ちを伝えること＝自分の思い通りにすることと誤っていましたが、アサーティブネスの考え方はディベート(討論)ではなく、ダイアログ(対話)であることに気付かされます。例えば、自分が相手に対して不満を感じていたとしても、いざ相手に伝える段階になると、具体的に何をしたいか自分がわからなかったりします。あるいは相手にも、正直にこちら側に伝える権利があり、それを受け入れることが重要で、当たり前のことだけれども、僕にとってはそれが目からウロコでした。そうですね、相手の権利が当然認められるからこそ、自分の権利が正当にあることに改めて気付かされたんですね。だから当然楽になる＝楽をする、どころかもっと大変になってしまいましたが、早く気付いてよかったのかもかもしれません。

まずは自分がより深く考えなければ本当は自分が何を望んでいるのか、相手との関係性をどうしていきたいのか、選択できません。考えて選択し、勇気をもって、でも誠実に、正直に伝えて、相手と対等にコミュニケーションをする。そして選択の結果、どうなるかは相手があることなのでわかりませんが責任を引き受ける。それはそのまま人生をどう生きるかにつながっていくのかもかもしれませんね。ですから、アサーティブネスはスキルではなく、生き方そのもので、自分の人間性の本質的なところまで及び、一生を通して学んでいくための道具なのだと思います。

人間関係において優位に立つ為のコミュニケーションスキルではありませんが、アサーティブコミュニケーションは相手との深い人間関係を築き上げるためにはとても大切な考え方、行動の仕方だと思いました。

トークサロン

「看護師として働く陽性者のミーティング」

これまでに、2回のミーティングが開催された。最初の参加者は「同業者が他にもいるなんて信じられない」と思っていたそうだが、初回(1月7日)が4人、2回目(3月4日)は8人と多くの看護師が参加している。

HIV陽性である看護師の退職勧告事件が続いている。実は差別が一番残っているのは医療や福祉業界なのかもしれない。そんなシンドイ労働環境で働く看護師たちが集うミーティングが始まった。

この会の「いいだしっぺ」ともいえる方と、もう一人参加者からの感想をお届けする。

(生島)

参加感想文

「はじめの一步」

マヌカハニー

今年が始まり間もない1月7日の夜、「第一回看護師として働く陽性者ミーティング」が開かれました。以前から「僕と同じ看護師の陽性者の方がいたら会ってみたい！」とお話しをしていたら、あれよあれよとその話の実現する日がやって来たのです。

2年前、HIVに感染した時にすぐ頭を占領したのは「感染がばれたら、退職だ。」という思いでした。自分も含め、世間は看護師を聖職と思っています。そして、実際は“んな事ねーよ！”と思いつつも聖職者でいたい自分もいます。人の命を預かる身として、感染者って“ありえねっつーの！”と思いながら。でも、僕は感染者という現実との間で、もがき苦しんで働いていました。もし、陽性者の看護師の方と集まり、色んな話が出来たらいいな…いや、同じ傷口を舐め合い、慰め合い、苦しさから救って欲しいと思っていました。

当日は、朝からソワソワして落ち着きませんでした。ミーティングを開くんだから、複数人集まる見込みがあるって事なんだろうが 今まで gay の看護師を見た事がない僕は、「看護師が感染者って、知られたくないから誰も来ないかも」、「誰も集まらずに（生島さんと）ふたりっきりのお茶会かな」と、不安だらけでした。そして、ミーティング開始時間ちょい前に部屋に伺ったら そこには、期待を裏切る人数の参加者が、3人も居らしたのです（嬉笑）。嬉しかったぁ！そしてホッとしたぁ！一気に僕の気持ちは高揚していきました。ぎこちないながらも、徐々に話しがスムーズになり 話しの流れを伺いつつ、傾聴して、其々が意見を出してと、充実した時間でした。同じ職種に仕える看護師という事でトピックスが似たり寄ったりしましたが 何ていうか、ツー・カーで話しが通じるリズム感は、看護師同士だからこそ 心地良さだと思いました。

僕は本当にこのミーティングが開催されて嬉しかったです。多分、当日一番楽しんだのは僕です（笑）同じ仕事をしている仲間と話せた事は、僕に安心と安全と安楽をくれました。今後も、このミーティングが継続されるように尽力していきます。だって、ミーティングがあると思うとワクワクするもん!!! これからも…これからこそ、どうぞ宜しくお願いします。

「両刀使いな私達。笑」

海雲台（ヘウンデ）

少～し時間がかかったかな。皆んなが自身について語り始めるまで。ここにいる全員が看護師なんだと痛感した。普段、患者さんの思いにそっと耳を傾けて寄り添う仕事。だから、いざ自分が語る場を与えられるとちょっと躊躇してしまう。そんなぎこちなさから始まったトークサロンでした。

私は昨年夏に発病。幸い比較的短期の入院を経て程なく職場復帰。やがて服薬も始まり今では以前と変わらぬ状況で働いている。その一方で、病気の事についてはごくごく限られた理解者にしか話しておらず、ふとした瞬間自分が穢れた存在、ズルい人間、モラルを逸した存在なのではないかという自己否定や葛藤に苛まれたりする。どんな看護師たちが集まるんだろう？

初めは聴き役ばかりの会だったが、少しずつ、少しずつ

つ皆が自身について語り始める。時には患者として共感し、時には看護師として自身の信念の再確認をし、徐々にその場には不思議な一体感が漂っていた気がした。自分は看護師として働いてもいいんだ、これからも看護師として働こうと思った日でした。

第1回 新陽性者PGM同窓会

新たなプログラムとして「新陽性者PGM同窓会」がスタートしました。第1回は2月9日に開催され、過去に新陽性者PGMに参加した陽性者が8名参加しました。

新陽性者PGMコーディネーターからと、参加者から3名の感想文をお届けします。

スタッフより

「新陽性者PGMとその後」

新陽性者PGMコーディネーター 加藤力也

約12年もの間、継続開催している「新陽性者ピア・グループ・ミーティング（PGM）」より良いスタートを目指して集まった参加者のみなさんの「その後」については、私コーディネーターを始め携わった誰もが関心を持っていました。

過去参加された方の中から「同窓会のようなものがあればいいですね」という声を頂いたことが後押しとなり、「新陽性者PGM同窓会」を開催することとなりました。

感染告知後6ヶ月以内という限られた時期に同じ立場の仲間と過ごす2ヶ月間が、本当はどういう意味があったのか、そしてそれがその後の人生にどんな影響を及ぼすかということは、実は少し時間が経過してから見えたりします。

久し振りに集まったかつての「仲間」は、和やかな場を共有しつつ、懐かしい話だけではなく今現在の悩みや疑問についても話しました。あの頃感じていたことを思い出したり、自分とは別の期の様子を聞いたりすることで、新たな発見もあったようです。

この同窓会をきっかけに参加者の中から新たな形でバレイズ東京と繋がってくれる人材が育ったり、既存のスタッフのモチベーションの向上にも繋がることが期待出来ます。参加者にとってはもちろん運営する側にとっても、非常に意義があり感慨深いプログラムだと思いました。

今後も年に数回のペースで続けて行きたいと考えています。卒業しても戻れる「場」があることが、みなさんの安心に繋がることを目指して。

参加者より

「来て良かったと思える同窓会とはまさに、この同窓会」

ダンシャリアン（30代 男性 告知年2012年 ゲイ）

新陽性者PGM参加当時は、まだ感染が発覚して間もない事と、漠然と他の感染者の情報を求めている事、そして同じ病気を抱える人との関わりが欲しくて参加したため、実りはあったものの、各会の話した内容を善く噛み砕いて理解したとは言いがたい状態でした。よって当初は同窓会に参加しても「得られるものは少ないのではない

か。」「新たに感染が知られてしまう人が増えるだけなのではないか。」「他の人と話し合ったところでなんになるのだろう。」といった思いが少なからずあったため参加には消極的でした。一方で「先輩や仲間と語り合う事自体が、少しでも安らぎになるかも知れない」という思いもあった為、勇気を出して参加を決めました。

その決断は正しかったです。異なるステージで同じ病氣と立ち向かう先輩や仲間と状況を共有する事、率直な質問をぶつける事で、何とも表現できない安心感が生まれる事がわかりました。雰囲気も明るく、笑いさえ飛び交いました。病院の先生から得られる情報で充分と思われる方もいらっしゃるかもしれませんが、ここで得られる安堵感は病院で得られるものとはまた違った良さがあります。次回も参加します。他の卒業生・仲間とお会いできる事を楽しみにしています。

「変わらない空気」

パッカ (男性 40代 2011年10月 既婚バイ)

目的は、同期メンバーとの再会と、自分は未服薬なので、先輩たちに服薬・副作用などについて、訊いてみたかったので参加しました。

参加当時のことを思い出すと、自分の悩みは、この病氣のことをいつどうやって、妻に伝えるかということでした。プログラムが終了し、自分の中で一区切りつき、四ヶ月後には伝えることが出来ました(ストレスはかなりあったようですが、受け入れてくれました)。

病氣と向き合わなければならない自分・他のメンバー、お互いそれぞれの状況・悩みを受け入れ、気持ちを整理し、区切りを付けるといった、段階を踏みながら、一步步進んでいくことは、とても大事だったと思います。プログラムに参加していなかったら、ちゃんと妻に伝えることは出来なかったと思います。代々の先輩たちがいてくれたから、同期がいてくれたから、自分がパニックにならず、落ち着いたことを改めて感謝します。

今回、参加された方の人数が少なかったのは残念でしたが、同期にも再会できましたし、少ない分、PGMのようで、皆さんそれぞれの話を聞くことが出来て良かったです。

ファシリテーターの方々、参加したメンバーの皆さん、優しく温かい方ばかりで、病氣・健康・食事等に対して前向きでいて、自分も頑張ろうと思いました。背中を押してくれるというよりは、見守ってくれている安心感は以前と変わらず、それがとても心地良かったです。

再度、その空気に触れることが出来て嬉しかったです。感想書きながら浸ってます。より前向きになれた有意義な時間でした。ありがとうございました。また参加したいと思います。

「つながりつづけよう！」 こうじ (PGM58期 東京都)

先日、PGM同窓会に参加した。初の試みということで、スタッフも参加者もきっとドキドキに違いない。

私は、2010年11月に感染が判明し、そのまま入院。告知されたその日、ベッドの上から吊るされた点滴用の金具を見つめながら、これからの生活、医療費など様々な事が脳裏に浮かび、不安に怯えて、いっそシーツをあの金具に巻きつけて自らの命を絶とうかと考えていた。そ

のことを翌朝回診に来た医師に言うと、それから朝晩に私の様子を見に来てくれていた。コーディネーターナースも、今後のことを親身に相談に乗ってくれた。生来の楽天的な性格が幸いし、今もこうして生きている。

退院後、この感染症であるが故の「孤独感」、「孤立感」からは絶対に逃れて生きていかないと、自分がどんどんダメになっていく恐怖にかられた。インターネットでHIV/AIDSに関する情報を貪欲に吸収して行くうちにたどり着いたのがぶれいす東京だった。恐る恐る電話をし、事務所に行った時は2011年の1月中旬だった。冬の寒さと暗い気持ちでますます気持ちが冷え込む。感染が判明して6か月以内の方にPGMがあるという話を聞いて、同じ感染者の不安な気持ちやこれからどういう風に生きていこうとするのかを聞いてみたいと思い、58期PGMに参加した。

初日、7名が揃う。参加者は20代から40代だったが、20代が多数派だった。そして私が一番年上だった。自分を含めてみんな緊張の面持ちだった。ファシリテーターもポジだということやこれまでのことについての話を聞いているうちに、緊張も解け、感染判明、仕事、家族や友人への告知、投薬、医療費、福祉制度など、これからの新たな生き方への知識を少しずつ吸収していくことができた。PGMは全4回あるが、やっと3回目のミーティングが終わってから、近辺の居酒屋で打ち解けていった。もっと最初からこんな風にいけてたらなあ、と思い、PGMが終わってもつながりを持とうということで、1か月に1度の飲食の機会を持つこととなった。しかし、それぞれの事情で3回どまりで終わった。その後も「情報」を吸収したい、共有したい、ネット上の仮想空間ではなく、現実空間での人とのつながり、特にポジとして、ポジだから、なんの障壁もなく話し合う機会を求めて、ミドルミーティングにも参加している。

時折、PGM58期のみんなはどうしているんだろうかと考える。そんな矢先にPGM同窓会が計画されたのだ。もしかして来る者もいるかもしれない、淡い期待と他の期別の方々にも会って話を聞きたい、話をしたい。そんな気持ちから参加した。

当日の参加者は8名。予想より少なかったが、服薬の話や、それぞれのPGMへの想いを語り、聞きながら、期別を超えたこのような集まりは大切なんだなと感じた。

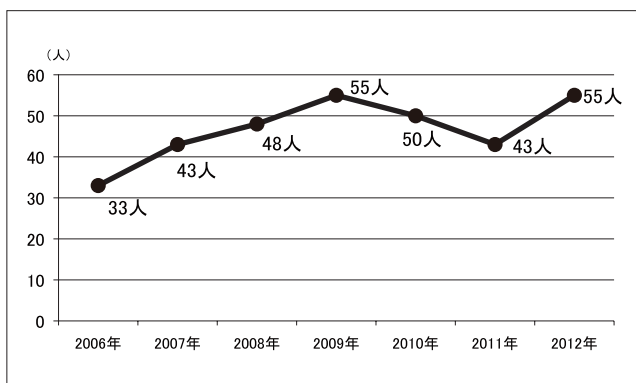
人は人の中でしか生きられない。いろんな生き方や考えを理解し、共有し、自分に役立てる。そして、この感染症とは否応なく一生付き合っていかなければならない。あれから2年が過ぎ、このような機会を得たことを本当にありがたく思う。運も幸せも、仕事もお金も、友人も恋人も、自ら動かなければ向こうからは来てくれない。だから、可能な限りいろんなことに積極的に関わり合い、つながりを着けて絆を深めていきたいと強く思った。本当にいい時間をみんなと共有できたと思った。スタッフは大変だろうけれど、これからもこのつながりの機会を提供していただきたいと強く願う。

第26回日本エイズ学会学術集会・総会 HIV陽性者参加支援スカラシップ報告会

ぶれいす東京がはばたき福祉事業団と日本HIV陽性者ネットワーク・ジャンププラスとの協働のもと実施した「第26回日本エイズ学会学術集会・総会 HIV陽性者参加支援スカラシップ」の報告会が開催されました。

「当事者参加のひとつの理想形」

2月3日(日)、「HIV陽性者による第26回日本エイズ学会参加報告会」が開催され、会場満員の50名以上の方に来場いただきました。HIV/エイズに関わる最新の研究発表の場である日本エイズ学会に、医療などの専門家だけではなくHIV陽性当事者も参加し、その知見に触れたり討議に参加したりする機会を作るべく設立された「日本エイズ学会学術集会・総会 HIV陽性者参加支援スカラシップ」。当日は、3名のHIV陽性者がこのスカラシップを利用して参加した学会の感想や、それぞれの地域での生活やHIV/エイズに関する活動の経験などについて語りました。



スカラシップ利用者数の推移

このプログラムは2006年の設立以来、学会側からも後援や学会参加登録証、ラウンジスペースの提供などの協力も得つつ、製薬企業からの寄付や助成金などによって独自に運営し、これまで7回の学会にてのべ327名のHIV陽性者の学会参加費用を助成してきました。スカラシップ利用者の多くは、プログラム主催のはばたき福祉事業団、ジャンププラス、そしてぶれいす東京のネットワーク上のつながりからアクセスしてきた人たちですが、年々プログラムの存在が浸透していく中で、そういうつながりは持たず、通院先の病院や学会のWebサイトから情報を得て問い合わせしてきたという人も増えています。

HIV陽性者同士で交流できる場所が欲しかったという人、情報収集はしたいけれど地元で開催されるHIVのイベントには知り合いに会うのを恐れて参加できなかったという人、中には、学会会場に行くまで自分以外の陽性者に会ったことがなかったという人など、このスカラシップ・プログラムが掘り起こしたニーズは実にさまざまなものがありました。そして、これまでに複数回学会に参加しているHIV陽性者の中からは、学会参加後に地元で当事者活動を始めたといった頼もしい報告も受けています。

そして、HIV陽性者の姿や意見に学会会場や参加レポート、報告会を通じて触れることは、多くの人たちにとって当事者の視点でHIV/エイズを捉え直す機会ともなり

ます。今回の報告会の来場者からも、当事者として生き生きと社会生活に参画していくスカラシップ利用者の様子を見ていて力づけられた、との感想が寄せられました。知識や情報を得るだけではなくさまざまに学会参加の機会を生かすHIV陽性者によって、当事者参加の意義がまたひとつ上の段階に昇華されたようで、運営側も手応えを感じながら、この1年の活動を締めくくることができました。これをまた来年度以降のプログラム運営につなげていきたいと思う次第です。

今年度のご賛同や助成、後援をいただいた企業・団体・個人の皆様、そしてプログラムの広報や運営などにご協力いただいた皆様には、あらためて御礼申し上げます。

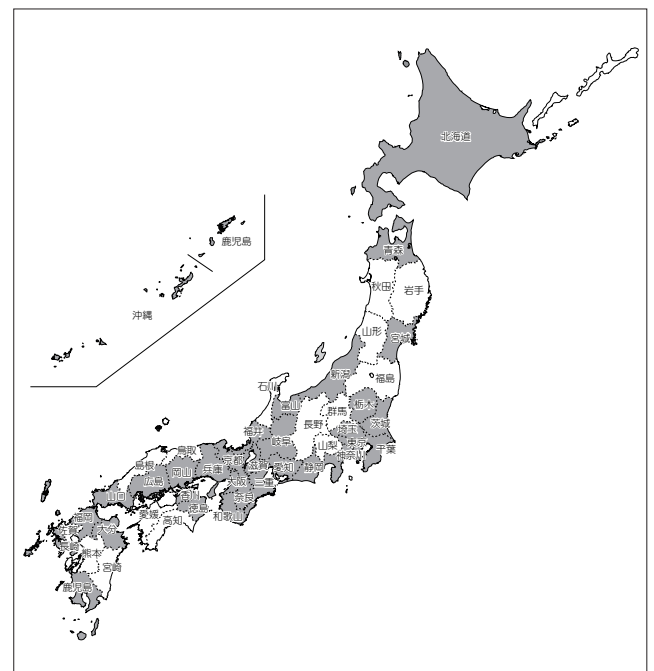
「日本エイズ学会学術集会 HIV陽性者参加支援スカラシップ」のくわしい活動内容とこれまでの実績については、スカラシップ委員会のWebページをご覧ください。

<http://www.ptokyo.com/scholarship/>

今年度のスカラシップを利用したHIV陽性者の学会レポートをまとめた「第26回日本エイズ学会学術集会・総会 HIV陽性者参加支援スカラシップ 報告書」は、スカラシップ委員会運営3団体の事務所で配布しています。PDF版は以下のURLからダウンロード・閲覧ができます。

http://www.ptokyo.com/images/Scholarship_Report_2012.pdf

(報告：大槻)



6年間で32都道府県からのべ327名のHIV陽性者がスカラシップを利用して学会に参加！

QOGL vol.2 ～性感染症編～「もしかして、STD?」

3月20日(水・祝)に、QOGL～Quality of Gay Life～の第2回が開催されました。今回は性感染症をテーマにしつつ、より良いセックスライフを考えるイベントとなりました。

今回のテーマは「性感染症」。今回は、一昨年ネスト・プログラムの「専門家と話そう」でも感染症専門医としてお話しいただいた東京医科大学の村松崇先生にレクチャーをお願いし、トークゲストはセックスの現場からということでハッテン場とウリ専からという、前代未聞な「ドクター×ハッテン場×ウリ専」というイベントが出来上がりました。

まだ2回目でいろいろ手さぐり、来場者の人数予測も全然つかない、という中で、お話しいただくことになった皆さんも大変緊張されていたのですが、始めてみると村松先生のレクチャーでは生々しい症例写真も出てくるシクロストークではゲストの皆さんから“もう一言いわせてほしい”的な割り込みもバンバン出てきて、とても濃密なトークライブになりました。

ウリ専のマネージャーである野原さんからは「(セックスワーカーに)コンドームを使ってほしいと頼んでいいのかとお客さんから聞かれた」というエピソードが出てくれば、ハッテン場のプロデュースをしている国見さんからは「お客さんに“コンドームを使わせる”ことはできないけれど“使いやすい環境”作りの工夫をしている」ことが語られるなど、病気の話だけではなく、セックスの環境づくりの話も多くありました。来場者のアンケートでも、「暗い話になるかと思ったが前向きになれた」というようなコメントがあり、個々のセックスライフを考えながら性感染症について知ることができるイベントになったかな、と思います。

来場者は19人で前回よりは増えたものの、広報活動にもっと力を注いで、もっとたくさんの人に、このイベ



ゲイゲイしいイベントは苦手な方も、こんな感じでやってますのでお気軽にご参加ください！



野原さん(左)と村松先生。ウリ専マネージャーと医療者というレアなツーショット。

ントを体験してもらえようようにしたいと思っています。次回はまた異なるテーマで、8月ごろの開催を予定しています。

(報告: sakura)

スタッフより

「生きることのリスク」

マサヨシ

性感染症がテーマでも、ただ「みんなで予防に努めましょう」だけじゃないところがQOGLらしい！

村松先生の言葉で印象的だったのが、「生きることのリスク」。これまでもたくさんの人が性感染症に関わって、乗り越えようとしてきた。それでもなくなるのには“やっぱり難しいのだ”ということ。息を止めることができないように、セックスだってしないわけにいかない。リスクをゼロにはできないのだから、やれるだけのことはやって、もし感染しちゃったらすぐに手を打つ。そうやってうまく付き合っていくことが大切なのだ、と。

感染しただけでダメ人間の烙印を押されるような気が(ちょっとだけ)していたけど、そうじゃないのだと思えて、少し気が楽になった。

しかし、ウリ専とハッテン場からのゲスト、お二人の話は本当に面白かった。ここには書けないオフレコトク、もっといろいろ聞きたかったな。セيفァーセックスを当たり前のようにしたい、安心して利用してもらえようようにしたいという真剣な姿勢、かっこよかったー。たぶん会場にいた全員が惚れたはず(笑)。利用する側も意識を変えて、お二人みたいな経営者を応援しなくちゃ。今どきリスクなセックスってエロくないよね、って。

QOGL
— Quality of Gay Life —
Vol.2 性感染症編
「もしかして、STD?」

日時 2013年 3月20日(水・祝)
14:00~16:00
(開場13:30)

場所 新宿コスミックセンター大会議室
(東京メトロ副都心線西早稲田駅3番出口徒歩5分)

出演者 先着50名 入場無料
※男性限定イベントです。

村松 崇
(東京医科大学感染症臨床医)

野原 周作
(ウリ専マネージャー)

国 見
(ハッテン場プロデューサー)

イラスト: 村田ボコ

「QOGL」は、Quality of Gay Life(グレイライフ)の略称で、
ゲイ・バイセクシュアル・トランスジェンダーの生活の質を高める、健康増進のためのイベントです。
第2回は2013年3月20日(水・祝)を開催します。
イベント情報はTwitterで発信しています。
@chokkyo_03 をぜひフォローしてください。

ふれいず東京
Gay Friends for AIDS

今回もフライヤーイラストは村田ボコさんの描き下ろし！

部門研修レポート

ぷれいす東京では、新人ボランティア合同研修の後に、各部門の研修を修了してからボランティア活動開始となります。部門研修のレポートを参加者の感想文とともにお届けします。

ホットラインの部門研修

合同研修の後、10月7日(日)8日(祝)で2日間みっちり部門研修を行いました。更に、モニタリング1回、実地研修3回という長丁場で、コミュニケーションを考えていただく研修。受ける方々にとっては大変だと思います。しかし相談を受けるためには、技術的なことだけではなく、精神的な安定やタフさが必要です。今年度は11名が手を上げてくれ、9名が修了しました。いろいろなことを吸収して、今後の活躍を期待しています。

新人スタッフ2名と世話人からの感想文をお届けします。
(ホットライン部門 コーディネーター：佐藤)

★ 2004年から縁あって、ホットラインのボランティアスタッフとしてお世話になっております。人と話すのはあまり得意ではないので、始めたころは自分のことで精いっぱい、電話を掛けてきた人のことはあまり考えられませんでした。

それが今、研修に携わることになるとは考えてもいませんでした。最初は失敗ないように教えなければと片意地を張っていましたが、新人さんの初々しさと、一語一句も逃さないという一生懸命さで、一緒に学んでいけばいいんだ、ぶれそうになる時に新人さんが自分で気づけるように、手助けをするだけでいいんだ、と気づきました。

これからも、ホットラインのスタッフになろうと来て頂く方の、少しでもお役に立てられるように頑張っていきたいと思います。(ホットライン 世話人：阿曽)

★ HLの研修は実際の相談に基づいてロールプレイングをしたりして、実践に近い内容で毎回やりがいがありました。しかし回数を重ねていく中で、検査を受けたいという思いが出て来て、感染不安を訴える相談にどう対応し、どうやって終わらせたらよいのか分からず答えが見つからないまま研修に参加していました。

研修が残りの1日となった時、検査を受けたら何か掴めるかも知れないとネットで調べ始めました。その結果、「もしかしたら私も？」と自ら不安を生み出してしまい、研修最終日はクライアントの不安に同調して言葉が続かず、終いには電話を切られてしまいました。

もしそんな私の状態をスーパーバイザーの方が指摘して下さらなければ、その日でボランティアを断念していたと思います。すぐに研修の追加を申し出て、それまでの間、アドバイスを頂きながら自分の不安と向き合い消化する事ができました。

誰もが無縁ではないHIV。だからこそ人それぞれ不安があり、対応も異なると当然だと気づきました。常に対等な立場で電話を受けられるよう、これからも頑

張っていきたいと思います。

(JOY)

★ 社会人生活も長くなり、仕事にも慣れてきました。似たような人と会い、振り返っても味気ない毎日。なんだか自分の世界が狭くなっている気がしてました。そんななか、今まで縁が無かったことをしてみようと、ぷれいす東京のボランティアに参加をしました。

ホットライン部門では、合同研修会の後に部門研修が2日、モニタリング研修が1日、実際に相談電話を受ける実施研修が3日間行われます。先輩スタッフの電話相談をモニタリングすると当初自分が想像していたものとはちょっと違いました。すごく親しげに相談者の方に語りかけていたり、かと思えば時には話を聞いているだけだったり。上手く言えませんが、妙に人間くさい印象を持ちました。

けれど自分で相談を受けてみると、その自然な振る舞いがなんとも難しいことが分かりました。変な固定観念から素直に話を聞けなかったり、妙に遠慮して何も伝えられなかったり。1日が終わると、悶々と一人反省会でした。研修を終えた自分を振り返ってみると、少しだけ新しい価値観・姿勢を学べたような気がしています。これからも細く長く活動を続け、色々と学んでいきたいです。(フィッシャー)

バディ・ワークショップ

合同研修後の新人ボランティアが、バディとして活動に参加するための部門研修、バディ・ワークショップを去る2012年11月4日(日)に開催しました。

この研修も合同研修と同様に、午前10時から午後5時までの1日がかりの研修です。内容は、計画立案があったり、仮想体験があったり、利用者に話を伺ったりと、これでもか!?!と言うくらい濃厚なものになっています。

今年度は7名が研修に参加し、無事に修了、全員がバディとして登録を行いました。今回は、そのうち2名の参加者の感想を紹介します。

(バディ部門コーディネーター：牧原)

★ バディ・ワークショップでは、バディとして活動していくにあたり、クライアントの方をより良く理解できるように、過去の喪失体験について話し合ったり、イメージ上で喪失を体験したりしました。また、実際にバディの派遣を依頼されているクライアントの方の話を聞く機会もあり、とても有意義な時間を過ごすことができました。HIV陽性者の方々は、病気が分かってから様々な生活の変化に直面し、喪失を経験しています。喪失を経験するとはどういうことか、実際にイ

メージ上で経験することで、陽性者の方々が経験していることを少しは理解できたような気がしました。

ワークショップの後、実際にバディとして体に障がいがある方の外出の付き添いをしたのですが、日々の生活の中で彼がどれだけ不安を感じているかを実感しました。特に、電車のホームなど人が多いところでは、私が横についていても人がぶつかってくるなど、一人で外出する大変さを知りました。

バディとしては、まだまだ未熟で学ぶことはたくさんありますが、少しでもクライアントの方々の力になれるよう成長したいと思っています。(カメ)

★ 私自身も陽性者で、感染を知ってからあと数ヶ月で5年目を迎えます。病気との付き合い方もなんとなく分かってきたようなこの頃、ボランティアなどしたことがないのですが、今日あるのも色々な側面で支援してくれた皆さんのお陰と思い、ささやかですが出来ることの第一歩としてチャレンジしようと思いました。

研修では、『バディは支援プログラムのひとつであるという意識を持つこと』の大切さを学べた気がします。そして『バディの役割はコーディネータと依頼者が決めるもの、役割のルールに従って行動しよう。』と思いました。こう言ってしまうとなにか冷たくて温かみの無い活動に聞こえてしまうかもしれませんが、そんなことは無いようです。むしろサービスの受け手も、またその提供者もそれぞれ考え・環境も違うのですから、チームとして継続可能で、むら無く活動をするには必要なことと納得するに至りました。

クライアントへの共感する気持ちは勿論必要ですが、過度な感情移入はあまりしない。これがボランティアを長続きさせるための知恵なのかもしれませんね。勿論、個人的なお付き合いを深めたいときには、別途バディの立場を離れれば、何の問題も無いでしょうし。ともあれまたひとつ良い勉強になりました。(SK)

ネスト・プログラム ファシリテーター研修

2012年度の新人ボランティア合同研修には、30人を超える参加がありました。そのなかで、はじめてネスト部門のボランティア募集を行いました。

2011年1月より利用登録制がスタートし、利用者の安全性が大幅に向上した一方、多目的室の入場時のチェックなど、ゲートキーパー的な役割を担う人材(セクレタリー)が必要となったことや、新陽性者PGMのファシリテーター、web NESTのアンサー執筆者など、HIV陽性者を含む多様な人材をプログラム運営のなかで必要とすることがきっかけです。

10/21(日)に、ネスト部門を希望した14人(男:10、女:4)と、ピア・プログラムの担当スタッフ2人が参加して、「ネスト・プログラム ファシリテーター研修」を行いました。講師は、ストレス・マネジメント講座を担当している野坂祐子さんと生島です。参加型プログラムを盛り込みつつ、はじめに、生島が活動への参加動機を振り返るためのワークを事例を使って行い、その後に、野坂さんからグループ・プログラムの機能や効果につい

て解説してもらい、最後にファシリテーションのポイントなどの講義がありました。(報告:生島)

「ひきだされる力」

むらさき

ネスト・プログラムへ登録し、昨年、10月ネスト・プログラムのファシリテーター研修、今年2月、3月でセクレタリーと活動を始めました。正直、研修内容そのものは、記憶の彼方になっていて、ぶれいすの事務所の方角を向いて土下座でもしなくてはいけない状況ですが……。

2月の「就職支援セミナー」がセクレタリーデビュー。参加者の方の「仕事するぞ!」という熱い眼差しと、企業担当の方の真摯で、率直な説明は、私までも、今すぐ転職した方がいいのではないか!という気持ちを駆り立てましたが、何よりも「お互いをわかり合いたい」という気持ちがあるだけで、環境はこんなにも優しい空気を持つのだと体験し、その環境をつくっている参加者の方たちや、ぶれいすというグループの力を感じました。3月ミドルMTGのときもそうでした。

思い出すと、研修ではグループの力を引き出すワークをしたような……。ネスト・プログラムをはじめ、ぶれいすはどうやら、いろんなプログラムや研修を通じて、いろんなひとたちの力を引き出しているようです。その力を使って、どんな活動が自分にできるのか、少しわくわくしてきたこの頃です。

「新陽性者PGMファシリテーターを目指して」 KONTA

きっかけは9月のボランティア講習会に参加したことです。時間的余裕ができ、何か社会に役に立つことや、会社以外のコミュニティと結びつきたいと考えており、漠然とした思いの中で参加しました。

ハードルが高そうな活動も多く、HIVポジティブであることを活かせる内容と思い、希望する部門の申込用紙をネスト部門として提出してきました。

しかし「新陽性者PGMファシリテーター」ができるのか?何をするのかわからないまま、10月21日の研修を受講しました。とても和やかな雰囲気の中で、自分自身を見つめ直すなど、自分自身を考えるいい機会になりました。具体的にファシリテーターに求められるレクチャーもあり、理解したような気分になりつつも、まだ不安や自信を持ってない自分がそこにはありました。

その後も、年末パーティーのボランティアをしたり、他のネスト・プログラムを受講したり、自分なりにだいぶ打ち解けて行くことができました。

後日、新陽性者PGMのコーディネーターの具体的なレクチャーを受けたり、先輩ファシリテーターたちによる振り返りミーティングに参加したりすることで、役割やイメージが少しわかってきました。

まだまだひよっこ候補者ですが、感染6ヶ月以内という一番戸惑う時期に関われるかもしれない期待感と責任の重さを改めて感じている今日この頃です。

Gay Friends for AIDS (Gフレ)電話相談研修

2012年9月某日、Gフレ電話相談の新人研修を開催した。ちなみに内々では「虎の穴研修」と呼ぶ。受講者3名に対

し現役相談員5名全員が講師となって周りを固め、オネエサマ達の鋭い視線とツッコミが飛び交う中で研修は進んだ。

受講者各人はすでにホットラインでの経験があるが、「ゲイによるゲイのための」Gフレ電話相談ではさらに困難なケースも少なくない。研修ではまず「内容と傾向」「ゲイ同士の相談の難しさ」「セクシュアリティ」「陽性者対応」についてのレクチャーを行なった。これは相談者の悩みがHIV感染不安などとセクシュアリティとが複雑に絡まったり、陽性者対応が相談件数の約1割に及んだという、Gフレ相談の特徴を反映させたものである。

レクチャーの後は恐怖の(?)ロールプレイ。上述の特徴をもとに、内容的に難度のやや高いケースをモデルとした。5分で区切りをつけて「振り返り」を行なったが、相談の内容や話の展開はもちろん、相づちの打ち方に至るまで、先輩諸氏の愛ある指摘がピンバシとなされた。ビデオ撮影して「振り返り」の際に確認すればより効果的なところ、このときはビデオカメラを利用しなかったのが悔やまれるが、全体的に密度の濃い研修であった。

(報告：F)

「ホットライン (HL) とGフレ電話相談で感じたこと」

ひさし

ホットライン2年目を迎え、Gフレ相談の話がありました。「内容がHLとは全く違うよ。」「関わりだして、周りから相談されるようになってしまった。」など、先輩たちからの楽しそうな勧誘で期待に胸が膨らみました。

いざ研修が始まるとHLよりも踏み込んだ内容で、ロープレでの先輩たちの見事な演技も加わり、第一印象は「これは本当に難しい」でした。

研修が進むにつれ、相談内容が自分もどこかで感じたことがあると思うようになりました。ゲイの悩み、相談相手がいない苦しさ、もっと発散したい葛藤…

HLで学ぶ知識に満足するのではなく、GフレではHIVについては知っている、だからどうすればいいのか、ゲイのリアルな行動を考えることが、この電話相談の難しさかもしれません。ただ、この難しさは結局いかに自分がゲイライフを充実させるか？に行き着くように思います。充実感人はそれぞれで、正しい答えなんてありませんが、これから相談下さる方々にとっての満足を一緒に見つけていきたいです。先輩たちとの話から、Gフレ相談員は普段のゲイライフを楽しむことが大事なのかもしれないと思います。

Peer Empowerment Program ～オトナの女的活動のあらたな動き～

2年前の研修後から、ありがたいことに細々と活動してきたオトナの女性部門への参加希望者が増え、部員2名から8名までに増員しました。女性のために何かやりたい！と入ってきてくれたのに、イベント企画までに時間が空いてしまうとモチベーションも下がってしまうので、昨年後半からは、2か月に1回は何か活動できるようにと動いてきました。コーディネーターとしての、「入ってきた人材を絶対に逃すまい！」という意気込みでもあります。

(いみ／みず)

オトナの女的社会科見学ツアー ラブピースクラブ第2弾

昨年10月に実施した第1回社会科見学ツアーが好評だったため、第2弾を企画し2月8日に実施、参加者は5名でした。

女性のカラダのことを考えて作られたラブグッズのみなを扱っているラブピースクラブを見学し、実物を見たり触れたりすることで、女性が「使う・使わない」を含め、主体性を持って「選択」できるようになることを目的に企画した社会科見学ツアーです。

新人スタッフより

私はふれいす東京での活動自体初めてだった事もあり、とても緊張し何をすればいいのか右往左往していました。しかし、私も参加者の人々と混ざり、女性の一人として

女性が主体的にラブグッズを選び、それをどのように選択していくのか考えましょとオトナの女性部門スタッフの皆さんに優しく背中を押してもらえ、とてもリラックス出来ました。

ラブグッズの通販はプライベートでも利用した事がありましたが、ラブピースクラブさんのショールームはおしゃれでとても清潔感があり、様々なラブグッズを実際に手に取って触れる事が出来るのでとても刺激的でした。自分に合ったグッズをゆっくり参加者の皆さんと交流しながら選ぶ事ができとても面白かったです。

5人の参加者の皆さんはとても明るく、自身の性に対し素直に向き合っている感じがしました。ツアーのグラドルルールに基づいたおしゃべりタイムでは、自分とは異なった視点や意見を交換でき、もっと皆さんと話したかったです。

参加者アンケートでもおしゃべりタイムの時間はとても楽しかった模様で、参考になった！という意見が多かったです。性にオープンなこのような機会は、あまり日常的に巡り会う事は少なくとても貴重な体験でした。自分が話せる範囲で、周りと共有する事で、悩みや疑問が解消されるともっと自分の性に素直に向き合えるのだなと思いました。とても素敵なツアーでした！

ラブピースクラブのスタッフの皆様はこの場を借りてお礼申し上げます。(PEP オトナの女性部門 綾乃)

Re:Programでの活動紹介

3月2日に開催された、リプロダクティブ・ヘルス関連のNGOのギャザリングイベントに参加し、部門の活動紹介をさせていただきました。部門からの参加は4名。このイベントは、中絶問題の解決をミッションとした「ピルコン」と若者世代にリプロヘルスサービスを届ける「Link-R」の主催。

私たちは活動内容よりも理念を中心に報告しました。というのは、以前このイベントに参加した際、他団体は「正しい情報の提供」に主眼が置かれていて不思議だったのです。

自分のカラダの安全・安心・気持ちよさを選べる、決められる、決めたことに罪悪感を持たずにいられる、こんな当たり前のことが当たり前じゃないオンナはとても多い。でも、本心はそうしたい。どうしたら行動が変われるのか。それは、「共感」することと「共有」することだ、と私たちは考えている。「正しい情報」はそのあと。この活動で、オンナが主体的にセーフターセックスするにはどうしたらいいのか一緒に考えていきたい。そんなことがきちんと伝わっていたら良いのですが…。残念ながら、意見交換する時間はなかったので、そこが気がかりです。

(みず)

ぶれいすボランティアスタッフ女子会 (第2回)

この女子会の目的は、ぶれいすのボランティアとして活動する女子(自称)が、ボランティア活動を通じて日ごろ感じていることや他部門と共有したいこと、聞いてみたいことなどをざっくばらんに話して、部門を超えたネットワークをつくることです。

第2回が、3月20日に9名が参加して行われました。今回は、ぶれいす東京が立ちあがって間もないころの話も聞けました。ネット環境が充分じゃなく情報が入手しづらかった時代から、いまや情報過多の時代になって相談内容も変化しているし、スタッフとしての悩みも変化していることとか、長期療養が可能になったことでのバ

ディとしての想いなど、PEPしか知らない私にとってはまさに「目からうろこ」。また、「電話相談の時にデンタルダムとかバイブとかって言うけど、実際に見たことも触ったこともないから、一度見てみたい」というコメントも。これって、まさに私たちの得意分野(笑)。こうしてつながってサポートしあうことが、女子会の狙いです。

「女子会っていうから、若い子じゃないと参加できないのかと思った!」という笑い話も出ましたが、年齢制限はありません!第3回も開催する予定なので、ぜひ参加してくださいね♪

(みず)



第2回目の女子会

女子会参加者より

お彼岸の暖かい日、ぶれいす東京の女子会に参加してみました。ことさら女子というくくりでの集まりは、今までにはなかったように思います。いろいろな部門の女性が集まり、お茶とお菓子で楽しく過ごしました。普段、他の部門の活動というのは、あまり見えてこないのので、いろいろ面白い話も聞けました。私も、バディ活動の昔は、薬もなく1人の陽性者とはそんなに長く続かなかっただけでも、今は体に障がいを持ちながら生活していかなければならない陽性者との長いお付き合いになる現状などを話しました。

私もぶれいす東京に来て17年になりますが、ぶれいす東京の多様性と自主性に居心地の良さを感じて長居してしまいました。ホットラインでも長く続けている方々もあるので、励まされていますが、今後こちらが高齢になってきて、バディとしてこの先どうしようと思います。年齢もまちまちの女子会、オトナの女性部門の皆様のおかげで、あっという間に時間が過ぎて、又の機会を楽しみに散会となりました。

(バディ部門 九岡)

部門報告 (2013年1～3月)



ホットライン

HIV/エイズ電話相談(ぶれいす東京および東京都委託)

ホットライン部門・活動状況 ()内は出席人数

1月	4日	新人修了ミーティング(2名)
	5日	新人修了ミーティング(4名)
	13日	HLミーティング(親睦旅行)(8名)
	18日	東京都電話相談連絡会(3名)
	26日	新人修了ミーティング(2名)
	30日	新人修了ミーティング(2名)
2月	7日	第4回東京都ボランティア講習会

		「HIV治療の最新状況」(5名)
	8日	東京都電話相談連絡会(3名)
	10日	スタッフミーティング(14名)
	14日	新人修了ミーティング(2名)
	22日	HL入力ミーティング(6名)
3月	8日	東京都電話相談連絡会(3名)
	10日	世話人会(5名)/ スタッフミーティング(17名)
	23日	フォローミーティング(3名)
	28日	個別ミーティング(2名)
	30日	フォローミーティング(3名)

相談実績報告

— ぶれいす東京HIV/エイズ電話相談 —

	1月	2月	3月
日 数 (日)	4	4	5
総 時 間 (時間)	16	16	20
相談員数 (延べ人)	6	6	7.5
相談件数 (件)	52	46	54
うち (男性)	46	42	42
(女性)	6	1	12
(不明)	0	3	0
陽性者相談	0	0	1
要確認相談	0	0	0
1日平均 (件)	13	11.5	10.8

— 東京都HIV/エイズ電話相談 (夜間・休日) — [委託]

	1月	2月	3月
日 数 (日)	12	12	15
総 時 間 (時間)	36	36	45
相談員数 (延べ人)	31	32	41.5
相談件数 (件)	197	167	200
うち (男性)	166	143	170
(女性)	29	23	30
(不明)	2	1	0
陽性者相談	0	0	3
要確認相談	2	1	0
1日平均 (件)	16.4	13.9	13.3

今年度は新人が多く、ホットラインのシフト運営が少し楽になりました。ケースカンファレンスを重ねて、それぞれの個性を生かした相談ができればと思っています。新年度からは新たな気持ちでスタートしたいと思います。

(報告：佐藤)



Peer Empowerment Program

スタッフ人数 8名

ミーティング

2月 8日 本郷三丁目ドトール (3名)
2月 17日 東山田ジョナサン (3名)

活動実績

2月 8日 オトナの女的社会科見学ツアー第2弾
3月 2日 Re:Program参加 部門活動紹介
3月 20日 第2回ぶれいす東京ボランティアスタッフ女子会

活動詳細については、11ページをご覧ください。

(報告：いみ)



バディ

陽性者のための直接ケア・派遣プログラム

バディ担当者ミーティング (1-3月実績)

1/5：3名 1/17：4名
2/7：3名 2/21：6名
3/2：中止 3/21：4名
※ 個別ミーティング 4件

利用者数

8カ所の医療機関に通院中、もしくは入院中の16名の方へのべ21名のバディスタッフを派遣

活動内容 (2013年3月末現在)

派遣継続中	15件
在宅訪問	15件
病室訪問	0件
派遣休止	3件

1月～3月中の動き

・派遣終了 1件 ・派遣調整 7件

5～7月のミーティング日程

午前ミーティング：

偶数月第1木曜 11:00 / 奇数月第1土曜 11:00
5/4 (土) 6/6 (木) 7/6 (土)

※ 木曜は参加者がある場合のみ開催。事前にご連絡下さい。

午後ミーティング：毎月 第3木曜 18:30

5/16 (木) 6/20 (木) 7/18 (木)

バディの現場から

2月17日 (日) にバディ・フォローアップトレーニングとバディ交流会を開催しました。フォローアップは、テーマ「身体に障がいのある人の支援」で講師に理学療法士であり鍼灸師などの資格を持つ諏訪さんを迎えて行いました。11名の参加があり、講義だけでなく、実際に車椅子を使っの体験学習なども行いました。また、その後はバディ交流会を行い、こちらも11名の参加がありました。今年度は定期的に研修会と交流会を開催したいと思いますので、スタッフのみならず、ぜひご参加下さい。

(報告：牧原)



ネスト

陽性者とパートナー・家族のためのプログラム

ネスト・プログラム参加状況 (2013年1-3月)

グループ・ミーティング

- ・新陽性者ピア・グループ・ミーティング (PGM) 第67期 (参加者6名)
1/19 2/2 2/16 3/2 修了
- ・第1回新陽性者PGM同窓会
2/9 (8名、ピア・ファシリテーター2名)
※詳細は P.5
- ・ミドル・ミーティング
1/12 (21名) 2/9 (24名) 3/9 (20名)
- ・異性愛者のための交流ミーティング
1/18 (8名) 2/15 (8名) 3/30 (13名)
- ・Women's Salon
「午後のお茶会～女子のためのフリートーク (1)～」
3/2 参加者4名
- ・陰性パートナー・ミーティング
2/2 (5名)
- ・もめんの会 (HIV/AIDS を支える母親の会)
1/23 (4名) 3/27 (3名)
- ・カップル交流会「今年もやります新年会」
1/6 (8組16名)

学習会

- ・アサーティブ・コミュニケーション 自己表現のABC
1/19 (12名) 1/26 (10名) ※詳細は P.3
- ・ストレス・マネジメント講座第18期
1/25 (7名) 2/22 (8名) 3/22 (9名)
- ・ベーシック講座「社会福祉制度」
1/30 (2名)

トークサロン

- ・就職活動を報告しあう会
1/16 (2名) 2/16 (4名) 3/23 (4名)
- ・介護職として働く陽性者のミーティング
2/18 (4名)
- ・看護師として働く陽性者のミーティング
1/7 (4名) 3/4 (8名) ※詳細は P.4

ミーティング(陽性者メンバー、ぶれいす東京スタッフほか)

- ・新陽性者PGMファシリテーター・ミーティング
第67期振り返り 3/13 (8名、6名)
- ・web NEST運営委員会
2/8 (2名、2名)

ピア・ファシリテーターによるプログラム等(厚生労働省委託事業)

- ・U40(アンダー・フォーティ)ミーティング
～10代から30代の男性HIV陽性者のミーティング～
1/24(参加者5名、ピア・ファシリテーター2名)
2/23(5名、2名) 3/23(10名、2名)
- ・第1回就職支援セミナー
2/20(33名、参加企業2社) *P.2参照
- ・セクレタリー(6回 8名)
- ・ピア・ファシリテーター(4回 8名)

ネスト・ニュースレター

1/4:1月号発行 2/7:2月号発行 3/7:3月号発行

新プログラムのご紹介

10月からスタートした U40 ミーティングに続いて、1月は、トークサロン「看護師として働く陽性者のミーティング」、2回連続のワークショップ「アサーティブ・コミュニケーション 自己表現の ABC」、2月に新陽性者 PGM 同窓会、就職支援セミナーと新しいプログラムが次々にスタートしました。参加者の感想文が2～6ページに掲載されていますので、ぜひご覧ください。(報告:佐藤、加藤、はらだ)



Gay Friends for AIDS

ゲイによるゲイ・コミュニティ向け活動 <http://gf.ptokyo.com/>

Gay Friends for AIDS 電話相談

1月 6件 (1日平均1.50件)
2月 4件 (1日平均1.00件)
3月 12件 (1日平均2.40件)

聴覚障がい者向けのメール相談対応

1月:0件 2月:0件 3月:0件

「QOGL」第2回開催!

3月20日に、「QOGL」の第2回を開催しました。性感染症とセックスライフをテーマに、非常に濃い話ができました。イベントレポートは8ページをご覧ください。

当日のアンケートでは、進行や来場者の制限などについてのご意見を多くいただきました。まだ試行錯誤な部分も多く残っていますが、今後よりよいイベントを継続して実施できるよう頑張ります。QOGLの第3回は8月頃に開催予定です。

GフレのFacebookページができました!

QOGLの広報活動をはじめ、さまざまなお知らせに活用すべく、Gフレのブログ・Twitter (@ptokyo_gf) に続き Facebook ページもオープンしました!

<http://www.facebook.com/ptokyoGF>

開設以来多くの方から「いいね!」をいただきました。あ

りがとうございます。引き続きよろしくお願いいたします。
(報告:sakura)



HIV陽性者への相談サービス

相談実績2013年1～3月

	1月	2月	3月
電話による相談	132	67	156
対面による相談	37	52	61
E-mail による相談等	158	132	142
うち新規相談	20	25	30

※メール新規は含まず

1～3月の新規相談者の属性(N=75)

陽性者: 49人(男性: 48 女性: 1)
パートナー: 7人(男性: 4 女性: 3)
家族: 4人(男性: 2 女性: 2)
専門家: 6人(男性: 5 女性: 1)
判定保留: 3人(男性: 2 女性: 1)
その他: 6人(男性: 4 女性: 2)

1～3月新規相談者の情報源(N=75)

WEB(PC/携帯サイト含)	30件	行政機関	4件
医療関係 (Dr.、Ns.、クリニックなど)	9件	他団体	3件
冊子/パンフレット/チラシ	5件	以前から知っていた	3件
カウンセラー (他団体、刑務所など)	5件	電話相談	2件
人的ネットワーク (家族、友人など)	5件	イベント	1件
陽性者/パートナー	4件	不明	4件

1～3月新規相談の内容

【ぶれいす東京のサービス利用、問い合わせ、積極的参加】[関東]

- ・ネスト・プログラム/バディ利用、利用登録等。計5件。
- ・PGMインテークで来所。計5件。
- ・異性愛者交流ミーティング参加希望。計2件。
- ・トークサロン(就職活動を報告しあう会)参加希望。計2件。
- ・ミドルミーティング参加希望。
- ・U40ミーティング参加希望。
- ・看護師として働く陽性者のミーティングに参加希望
- ・就職支援セミナーに参加希望。計4件。
- ・ぶれいす東京のボランティア希望。

【検査や告知に関する相談】[関東、中国/四国]

- ・性的関係のあった人から受検を勧められて受けたら陽性だった。(計2件)
- ・自宅検査で陽性と出てしまったがどうしたらいいだろうか。
- ・男性セックス・ワーカー。以前検査で陽性と判明。陽性だと仕事ができなくなると思い、病院に行く事ができない。
[判定保留]
- ・さっき確認検査をしてきた。医者からは陽性の可能性が高いと言われて不安。

【告知直後の漠然とした不安】[関東]

- ・感染が判ったばかりのため漠然とした不安がある。
- ・告知直後の不安。関連する他の疾患について知りたい。

【対人関係に関する相談】[関東、近畿、中国/四国]

- ・パートナーへの通知。
- ・男性間のSEXでの感染不安。

- ・家族との関係がうまく行かずに悩んでいる。
- ・病気のことを親にどのように話したらいいだろうか。
- ・病気のことを主治医以外に話した事がない。

【生活に関する相談】〔関東、近畿〕

- ・生命保険の診断書に既往歴としてHIVが記載されていたが問題はないか。
- ・服役中に感染判明。社会復帰についての相談。
- ・社員旅行で海外に行くがパスポートを作る際に病気が会社にバレないか。

〔就労〕

- ・就労に関しての相談。計4件。
- ・医療従事者として仕事を続けられるか。
- ・近々休職予定。その後の復帰について。
- ・転職先へ通院のことを話すときに診断書の提出を求められたらどうしたらいいか。
- ・陽性と判ると解雇されるということはないだろうか。

【制度に関する相談】〔関東、近畿〕

- ・健康保険のプライバシーについて。
- ・首都圏に転居した場合について。
- ・医療費がどれくらいかかるのか。
- ・障害者手帳の等級見直しについて。更新時に見直しをされて等級が下がってしまう可能性はあるか。
- ・身障手帳申請時に役所では誰が確認をするだろうか。知り合いがいるため心配。

【心理や精神に関する問題】〔関東、近畿、中国/四国〕

- ・気持ちが前向きになれない。
- ・術前検査で判明。退院後に不安で眠れない。他の人はどうしているのだろうか。
- ・感染から時間が経ち、自分が話をできる場所を持つと思ひ連絡をした。

【病気や病態の変化や服薬について】〔関東〕

- ・クラミジア治療のために抗生物質を服用。HIVの薬と同時に服薬をしてもいいか。
- ・病院から処方を受けて飲むだけなのだから、副作用が不安でなかなか服用できない。
- ・服薬が必要な状況ではあるが、経済的なことが整っていないためまだ飲めない。

【医療体制や受診に関する相談】〔関東、九州/沖縄〕

- ・海外から帰国したばかり。日本で医療を受けるにはどうしたらいいのか。
- ・地元では医療を受けたくないがどうしたらいいか。
- ・入院時、間質性肺炎と言われてひどい対応を受けた。

【周囲の人からの相談】〔関東、近畿、九州/沖縄〕

- ・(陰性パートナー)遠距離の相手と久々に会うためセーフアセックスについて相談。
- ・(陰性パートナー)通知を受けてからずっと会えない状態だった。
- ・(陰性パートナー)婚約者からの通知を受けての混乱、子づくり、今後の関係性など。
- ・(陰性パートナー)陽性であるパートナーの今後の生活について相談。
- ・(陰性パートナー)相手の薬物使用の相談について。
- ・(陰性パートナー)歯科の情報がほしい。
- ・(陰性パートナー)彼氏が病気がとわかった。何か生活のなかで気をつける事はあるか。
- ・(妻)夫の突然の病状変化から感染判明。漠然とした不安。
- ・(母)息子の感染が未だに受け入れられない。
- ・(母)息子の感染が判ったばかり。今後の支援について。

- ・(父)簡易検査で娘が陽性とわかった。どうしたらいいのだろうか。
- ・(父)息子の薬物使用からの更生について。
- ・(友人)陽性者本人の面談に同席。友人として何か出来ないかと思っている。
- ・(友人)友達が陽性とわかった。自分がどうしたらいいのかわからなくなっている。
- ・(SEX相手)酔った拍子にコンドーム無しでアナルをやられた相手から陽性だと通知を受けた。感染を早く知るにはどうしたらいいか。

【専門家からの相談や連携】〔関東〕

- ・(企業人事)就職支援セミナーについて。
- ・(企業人事)障害者雇用について関心がある。計2件。
- ・(企業人事)職場研修の依頼。計2件。
- ・(企業総務)企業の総務課で陽性である本人から相談を受けている。雇用主側の対応について。

(報告：牧原／生島／福原／神原)



研究・研修部門

研究事業

厚生労働科学研究費補助金エイズ対策研究事業「地域においてHIV陽性者等のメンタルヘルスを支援する研究」

(研究代表者：樽井正義)

- ・1月10日：平成24年度中間評価資料および研究成果発表会抄録を提出。
- ・2月1日：平成24年度第4回班会議を開催(於ぶれいす東京)。参加者7名。
- ・2月18日、3月7日：「NGO等における支援の研究」(樽井分担研究)のインタビュー調査を実施(於ぶれいす東京、CHARM)。
- ・「薬物使用者を対象にした聞き取り調査 ～HIVと薬物依存との関連要因をさぐる」(生島分担研究)のインタビュー調査を継続中。
- ・「地域の相談機関におけるHIV陽性者への相談対応に関する調査」(生島分担研究)の調査票(東京・大阪の1,843カ所の行政窓口へ発送、750カ所より回収、回収率40.6%)の分析中。

上記と併行して、平成22年度制作のパンフレット「職場とHIV／エイズ」を改訂・増刷した他、平成24年度総括・分担研究報告書を制作中です。

その他

- ・2月2日～3日：市川班・日高班合同班会議に参加。
- ・3月22日：MSM首都圏グループ地域連携会議を開催。参加者29名。

研修事業

受託研修協力

- ・2月23日～24日：青年海外協力隊エイズ対策技術補完研修(シェア＝国際保健協力市民の会主催)に運営協力。参加者11名。

職場研修(東京障害者職業センター「雇用管理サポート」事業など)

- 1月 9日 就業移行支援事業所ウィングル本社にて講演。参加者40名。

- 1月 31日 東京障害者職業センター「雇用管理サポート講習会」にて講演。参加者16名。
3月 6日 三井物産ビジネスパートナーズにて研修。参加者50名。

その他

- 1月 18日 akta「デリヘル勉強会」にて講演。参加者18名。
1月 22日 平成24年度HIV/AIDS症例懇話会に参加。参加者50名。
1月 29日 北多摩南部保健医療圏HIV/AIDS症例懇話会に参加。参加者40名。

- 2月 2日 お茶の水女子大学「NPOインターンシップ学生実習報告会」に参加。参加団体4団体。
2月 12日 沖縄県保健師研修会にて講演。参加者16名。
2月 17日 akta Talk Show「HIVと、ドラッグのこと②」にて講演。参加者65名。
3月 11日 沿津エイズ医療対策連絡会にて講演。参加者27名。
3月 15日 葛飾区エイズ連携会議にて講演。参加者24名。

(報告：生島／牧原／大槻)

特定非営利活動法人 ぷれいす東京 2012年度 活動報告会のご案内

今年もぷれいす東京の活動報告会を開催します。

前半は、恒例の「リレー方式」の部門報告。多様なスタッフが各部門から登場し、日頃の活動を現場感覚いっぱいに届けます。

後半は、ここ数年、HIV医療の現場や支援機関で、対応のあり方が議論されている「薬物使用とHIV」をテーマにしたトークコーナーがあります。

ゲストには、刑事法が専門の若手研究者と、ダルクのスタッフをお迎えしました。また、この企画のために、HIV陽性者で受刑の経験がある方々の声を事前に集め、「HIVと薬物使用～刑事施設からの社会復帰」の課題について考えます。

■日時

5月26日(日) 14:20～17:00(開場 14:00～)

※どなたでも参加できます。ぷれいす東京の会員、賛助会員、寄付者、ネスト・プログラム利用者は無料。それ以外の方は、参加費として1,000円いただきます。

■プログラム

○部門報告

ホットライン / Peer Empowerment Program /
Gay Friends for AIDS / バディ / ネスト /
HIV陽性者への相談サービス / 研究・研修

○トークコーナー

「HIVと薬物使用～刑事施設からの社会復帰」

ゲスト：丸山 泰弘さん(立正大学／刑事法担当)

中山雅博さん

(アパリ・クリニック上野／日本ダルク職員)

司 会：生島 嗣

■会場



■当日の問い合わせ先

ぷれいす東京 携帯電話：080-5387-8341(当日13:00～)

■懇親会

活動報告会終了後に会費制の懇親会を予定しています。お酒を飲む人も、飲まない人もネットワークを広げませんか？活動報告会の前半までにお申し込みいただければ、参加できます。

**特定非営利活動法人 ぷれいす東京
2012年度 総会について**

5月26日(日) 13:20～13:50

会場 新宿区戸塚地域センター 多目的ホール

※総会の議決に参加できるのは正会員のみとなります。

編集後記

- 週末を利用して、三鷹のオーガニック農園で野菜作りを習いはじめました。普段は携帯電話やパソコン等に接する時間が多いせいか、畑の土に触れたり、太陽の光を浴びる時間がとっても心地良いです！(こんどう)
- 4月7日(日)にお花見を開催。去年はツボミをながめ、今年は葉の緑を楽しんだ(笑)。参加者は約60人。嵐の翌日の青空のなか、この日を楽しみにしていた人たちと、時に突風に吹かれながらも親交を深めた。来年の宴が今から楽しみだ。(いくしま)
- 露地ものの季節になったので、不揃いのイチゴをたくさん買ってきてジャムを作り、瓶に詰めて完成。安くておいしい旬の味と香りを保存して楽しむ知恵なんだろうけど、1週間ですでに3分の2くらい食べてしまった。おいしいものって保存食に向いてない…。(やじま)

編集・発行：特定非営利活動法人 ぷれいす東京

〒169-0075 東京都 新宿区 高田馬場 4-11-5 三幸ハイツ 403
TEL: 03-3361-8964 (月～土 12～19時 ※祝祭日を除く)
FAX: 03-3361-8835
E-mail: office@ptokyo.com

ぷれいす東京: <http://www.ptokyo.com/>
Gay Friends for AIDS: <http://gf.ptokyo.com/>
web NEST: <http://web-nest.ptokyo.com/>
Twitter @placetokyo (<http://twitter.com/placetokyo>)
Facebook: <http://www.facebook.com/PLACETOKYO>